

## 中島三千男先生との出会い

台湾師範大学・台湾史研究所

教授 蔡錦堂

一九九〇年代初頭、まだ台湾・淡江大学の新米教師の私の所に、ある日、台湾・花蓮の原住民地域に建てられた「神社」のフィールドワークの前に、台北でお会いしたいという旨の手紙が届きました。それが契機で中島先生と初めてお会いし、当時未出版の博士論文を先生に一冊贈呈しました。

一九九七年、筑波大学歴史人類学科の雑誌『史境』第三十四号に、中島先生ご執筆の書評が載せられています。

一九九四年、同成社より出版した私の博士論文『日本帝国主義下台湾の宗教政策』についての評論でした。先生はいくつかの問題点、特に「蕃地」（原住民地域）に対する宗教、神社政策が欠けていることを指摘しましたが、「本書は植民地研究の文化面における労作として高い位置を占めるものである」と評価してくださり、恐縮と同時に感激を覚えました。それ以来、中島先生と文通を続けてまいりました。先生からの年賀状を、漫画好きのわが家は毎年楽しみしております。幸せな中島家の様子を版画風で表現した傑作の数々が奥様の手によるものだと知ったのは、つい三、四年前のことでした。

二〇〇二年十月、先生は私が中京大学主催のシンポジウム「台湾の近代と日本」に参加し、「台湾の忠烈祠と日本の護国神社、靖國神社との比較」という報告をすることを知り、横浜から名古屋へわざわざ足を運ばれました。しかし主催者側の都合で当日の日程に変更があり、午後の予定だった私の発表が午前中になつたため、昼過ぎに到着した中島先生は私の発表を聞くことができませんでした。先生はそのことについて事務局の人に強い抗議をされたとのこと。私の未熟な報告を聞きに、はるばる名古屋までお越しになつてくださったこと自体が、私にとってこの上ない光榮で、今でもかたじけなく思つております。

二〇〇八年二月、神奈川大学で第三回COE国際シンポジウム「場の記憶・からだの記憶・非文字資料研究の新地平」が開催されました。当時、神奈川大学の学長を務めていらっしゃった中島先生は、私をコメントーターとして招聘し、旧満州における神社遺跡の調査結果についての報告などを批評させてくださいました。私と神奈川大学との深いご縁は、その時が発端です。

二〇一二年一月末、中島先生は台南の旧開山神社跡地の調査を目的に来台されました。私もお付き合いして台北にある一代目の旧台湾神宮の「地下神殿（防空壕）」や台南の旧開山神社、成功大学、旧盛り場などをご案内しました。取り外されたまま、離れた場所に放置状態にある旧開山神社の鳥居の笠木に座つたり（写真1）、アイスバーを嬉しそうに口にする「不良おじさん」一人組（写真2）など、思い出をたくさん作りました。

ある晩、わが家四人揃つて先生と一緒に台湾料理を食べました。実は、うちの子たちは前から中島先生の大ファンで、「面白い年賀状の先生」にお会いできるのでわくわくしておりました。レザーコート姿で現れた先生のことを、その日から「型男校長（格好いい学長先生）」と呼ぶようになりました。



写真 1



写真 2

二〇一二年五月、台湾師範大学台湾史研究所が中島学長をお招きして、「海外神社跡地のその後」と「日本人の三つの戦争観」というテーマで二回の講演をしていただきました。先生流の充実した内容と資料をもつて師範大学の学生を魅了しました。その後、わが校の張國恩学長と懇談の結果、台湾師範大学と神奈川大学の学術交流協定が結ばれ、それ以来、留学生の交換など様々な交流が続いております。

二〇一二年十二月、私は神奈川大学非文字資料研究センター主催の「第二回海外神社公開研究会」に参加し、中島先生及び津田良樹先生の発表のコメントーターを務めさせていただきました。その夜、中島先生、大里浩秋先生、栗原純先生と神奈川大学近辺のコーヒーショップで雑談をしました。甘い物がお好きの中島先生はもちらん甘い飲み物を飲みながら、そろそろ定年退職だとおっしゃいました。

あれからもう二年半、なんと早いことでしょ。「元神奈川大学の中島三千男です」というタイトルのメールに接し、さすがに驚きました。『退職記念号』に一文を、との編集子からの依頼、これはまた身に余る光榮です。中島先生のことを、威風堂々たる学長・学者よりも、甘いアイスキャンディを舐める、人間味にあふれた優しいお方だと、私はいつも思っております。定年を迎える、日常生活により多くの余裕を楽しみながら、また新しい研究成果を見せてくださるのではないかと、期待が膨らみます。先生のますますのご健康とご活躍を心からお祈りしております。